

ゲーテと言葉について

野原章雄

Über Goethe und Sprachen

Akio Nohara

Goethe hatte in seiner Jugend unter zwanzig Jahren viele Fremdsprachen gelernt, z. B. Lateinisch, Griechisch, Hebräisch, Französisch, Italienisch, und Englisch u. a.. Das diente ihm als wesentliche Hilfe in seiner späteren Lebensabschnitte. Diese Abhandlung befaßt sich vor allem mit Goethe und mit seiner sprachlichen Dispositionen. Goethes Aphorismen können als die Kunst der Sprache ausgewertet werden. "Die Maximen und Reflexionen" sind zwar kurz im Stil, aber prägnant in den Sätzen. Dieses Werk kann in dem Menschen zahlreiche Denkformen wie auch Bewußtseinskritik hervorrufen. Goethes philosophische Überzeugungen und allgemeine Lebensauffassung sind in dieser Werke von seiner sprachlichen Kenntnissen nicht zu trennen. "Dichtung und Wahrheit" und J. P. Eckermanns "Gespräche mit Goethe" weisen deutlich auf einmalige Ausdrucksfähigkeit und Sprachtheorie hin, die lehrreiche Thesen für den Interessanten darstellen. Goethe ist auch in der Problematik der verschiedenen Dialekte äußerst ernsthaft mal auch Bühnenleiter in Weimar gewesenes war. In dieser Zeit kümmerte er sich stets um die Ausdrucksweise der Schauspieler.

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) と言語を考えるために、ここではエッカーマン (Johann Peter Eckermann, 1792-1854) の『ゲーテとの対話』とゲーテの自伝『詩と真実』を中心にしてゲーテの言語観と言葉への取組み方を見る。三つの主要テーマを設け、これに関連する事項をあげる。ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) はエッカーマンの前著を評して「彼のゲーテとの対話は今世紀の最良の書である。」⁽¹⁾と激賞しているほどゲーテの言語活動と夥しい作品群の背景を知るには欠くことのできない資料である。『詩と真実』からはゲーテの個人体験と時代の歴史的風景が見られ、言葉や趣向の推移を知ることができる。ゲーテの年齢区分からすれば、第1部はこの詩人の1~15歳 (1749-1764年) までで、次の第2部は15~22歳 (1764-1771年) の学生時代へと移り、第3部は22~25歳 (1771-1774年) で学生時代を終えて独立し社会での活動が開始された時期であった。第4部は前部と重複した箇所が見られ、整合性に乏しく前部の補遺的色彩が強く詩人の言語観察を試みるのにそぐわない点が多い。1800年頃から書き始められたという夥しいアフォリズム作品群には簡潔さの中でもゲーテの思想、真情をよく吐露しており参考になるものが多い。ゲーテの言語(業)は現代人と同じく *sprechen, sagen, reden, erzählen* したり、あるいは人と *unterhalten* したり、*diskutieren* した時のものと、それに自らの作品を *schreiben* したり、秘書に *diktieren* させたもの等多方面にわたるものである。ゲーテには他にまだ *dichten* (詩作する。) という言葉も加わってくるのである。

I. ゲーテと外国語

—(1)—

ゲーテの父親は教育熱心な人であった。自分に欠落しているものを子供

に実現させようとするのは親ならば誰しもいただく願いであり、まるでもう一度この世に生きて、これまでの人生経験を今度こそはほんとうに役立てようとするようなものである。⁽²⁾ゲーテの父親は自分の知識に自信があり誠実な忍耐力を持っていることを確信して当時の学校教師を信用していなかったようである。知識階級の人たちは自分の子供の教育は自分の手でやり、どうしてもやむをえないと思える分野だけは個別の授業を本職の教師にやらせようという風潮が当時の社会にあった。ゲーテの持って生れた才能のいくつかは父親にはないものであったから父親はそれだけ余計にゲーテの才能を高く評価したものだ。父親は刻苦勉励し、不拔の忍耐力を持ち、倦むことのない反復によって法学博士になり、さらに宮中顧問官になったような努力型の人間であった。

—(2)—

ゲーテはラテン語の勉強をJ. J. G. Scherbisという家庭教師について1756年から60年まで習っている。7歳から11歳の早い時期に学んだのである。ゲーテはラテン語の文法を勝手な法則としか思わなかったようで好きにはなれなかったと後年述べているが、韻をふんだラテン語の入門書として当時よく知られていた『良き韻文のラテン語暗記読本』を使っていた。

父親はゲーテにこのテキストを暗記させるかたわらで1歳下の妹のコールネリアにイタリア語を教えているのである。ゲーテは自分の本をそっちのけにして隣りのイタリア語に耳を傾けている。イタリア語はラテン語のおもしろい変形としてゲーテには思えたようで容易にこれを習得していた。⁽³⁾ゲーテが3歳から16歳の間に受けた外国語の個人授業はまだこの他にある。ラテン語の先ほどの教師からギリシア語を7歳から11歳まで習っている。フランス語は8歳から13歳にかけて、M. M. Gachetから習い、イタリア語は父親以外にD. Giovinazziからも16歳の初めにならっている。

イディシエ語⁽⁴⁾も12歳の時にChristamicusという人から学んでいた。さらにヘブライ語は13歳から15歳にかけてJ. G. Albrechtから学ぶ。英語は同じ13歳から14歳までJ. P. C. Schadeから教わっている。「外国語を知らない人は自国語についても何も知らない。」⁽⁵⁾という意識がすでに少年時代から育まれていたのではあるまいか。語学以外にも個人授業として「読本」と「習字」もやっていたから、かなりの学習量になった筈である。個人授業の時間は増加する一方であったが、ゲーテはそれを近所の子供たちと一緒に受けていたが、この共同の授業はあまり役に立たなかったようだ。

その後ゲーテのヘブライ語の学習がどうなったであろうか。ヘブライ語学習の当初の目的は旧約聖書と新約聖書を理解するためであったという。この二つの聖書を理解するためには原語を知らなくてはならないことをゲーテは聞かされていたのであるが、ヘブライ語に関するゲーテの知識は新約聖書の域を出なかったこともあって次第にこの言葉とギリシア語から遠ざかっていったようである。

ところでゲーテは教養の源泉をイタリア語、フランス語、英語といった実用的な言語に求めていた一方で、古代語への関心も大いに持っていた。古代語の重要性を痛感しているのである。ラテン語の中に修辞学の模範と西洋世界がかつて持っていた価値のある人びとの遺産がこの言語にあることを彼は確信していたのであった。ゲーテは晩年にエッカーマンにラテン語とドイツ語で植物名を書き記した多くのカードを見せた。植物名を暗記するためと、ラテン語を学習するためでもあった。壁にこのカードがべたべた貼られた部屋があった。

— (3) —

ゲーテが10歳の1759年の1月1日にフランス軍が帝国直属都市であるフランクフルトを占領する事件が起きた。都市駐留部隊指揮官の F. d. Tho-

ranc伯爵の宿営にゲーテの家になった。伯爵は1761年5月30日まで滞在している。この時にゲーテのフランス語が大いに重宝されたことは言うまでもないが、ゲーテ自身がフランス語をどうして駆使できたかを具体的に言っているので引用してみる。「持って生れた才能が役立ったわけで、わたくしはある国語の音律、その動き、抑揚、語調などの外部的な特徴をなんなくつかむ能力にめぐまれていた。ラテン語から類推してわかる言葉も多かったし、それ以上にイタリア語を介しておぼえられる言葉も少なくなく、このようにしてじきに召使や兵隊、番兵や訪問客の話からいろいろと言葉を聞きかじって、会話の仲間入りをするところまでゆかなくても、少なくとも簡単な問答ぐらいはやれる程度になった。」⁽⁶⁾

しかしゲーテはこれらのこともメッツ (Metz) からフランクフルト市会が招いたフランス劇団の上演から得た利益に比べるとはるかに少ないものであったと言う。

II. 『ファウスト』の「書齋」(一)(二)の場から

—(1)—

ゲーテと言葉を問題にする時にはゲーテの畢生の大作『ファウスト』中のファウストとメフィストーフェレスの科白を取り上げてみるのは有効な分析法と思える。第1部にある二つの「書齋」の場をみよう。「書齋」(一)に登場するものは、ファウスト、メフィストーフェレス、一匹の彪犬、霊たちであるが、ここではファウストが彪犬に向ってしゃべる科白は言葉とその意義の關係の重要さを示唆してくれるものである。

我我は超地上的なものを尊重することを学び、
また天の啓示に憧れるが、その啓示は、

新約聖書に示されているものほど、
貴く美しく輝いているものは外にはない。

あの原典をひもといて、

誠実な気持でひとつ、

神聖な原文を

好きなドイツ語に訳してみたくなった。

こう書いてある、「太初に言葉ありき。」

(○印の原文：Im Anfang war das Wort! v.1224)

もうここでおれは聞える。誰かおれを助けて先へ進ませてはくれぬか。

言葉というものを、おれはそう高く尊重することはできぬ。

おれが正しく霊の光に照らされているなら、これと違った風に訳さなくて
はなるまい。

こう書いてみる、「太初に意味ありき。」

(Im Anfang war der Sinn v.1229)

軽率に筆をすべらせぬよう、

第一句を慎重に考えなければならぬ。

一切のものを削り成すのは、はたして意味であろうか。

こう書いてあるべきだ、「太初に力ありき。」

(Im Anfang war die Kraft! v.1233)

ところが、おれがこう書き記しているうちに、早くもこれでは物足りない
と警告するものがある。霊の助けた。おれは咄嗟に思いついて、

確信をもってこう書く、「太初に業ありき。」

(Im Anfang war die Tat! v.1237)

この箇所からはゲーテ自身の言葉の解釈の厳密な姿勢、態度が汲みとれる。
ここでの「原典」がギリシア語で書かれたルター (Martin Luther, 1483

-1546) 訳の新約聖書を指しているのので、“Logos”を“Wort”と訳してあるのは当然であろう。(7) “Logos”という言葉がストア派とアレクサンドリア派の哲学から新約聖書の中へ入ってきたものであり、同時に“Wort”(言葉) “Begriff”(概念) “Vernunft”(理性) を意味するものである。(8) このように説明するのはTh. Fr L. J. Scheithauer教授である。1774年にヘルダー(Johann Gottfried Herder, 1744-1803) は手書きの“Johannes”(ヨハネ伝)の中でこのような苦言を呈しているのであった。「Urbegriff(根本概念)が何を意味するのか、ドイツ語は言っていないし、Begriff und Ausdruck(概念と言葉)、Urbegriff und erste Wirkung(根本概念と第1印象)、Vorstellung und Abdruck(想像と復刻)、Gedanke und Wort(考えと言葉)を同時に包括しているものである。たとえば、Gedanke(考え)、Wille(意志)、Bild(表象)、Urkraft(根源的力)、の意味も含むものである。」という。ヘルダーはさらに1775年に出された新約聖書の解説の中で“Logos”をGedanke! Wort! Wille! Tat! Liebe! と訳しているのであった。

ところでファウストは“Logos”をまず最初に全くルターと同じように“Wort”と訳しており、彼はその“Logos”の意味をより深く理解しようと努力したのであるが、その本来の概念からは皮肉にも次第に遠ざかってしまうのである。

“Logos”に様ざまの語意がつけられて解釈されるようになったのは、何もヘルダーやゲーテの発想ばかりではなく時代的な背景もあろう。

E.Trunz教授は“Logos”という言葉にこの場面で、“die göttliche Vernunft(神の理性)、das Schöpfungsprinzip(創造の本源)、der fleischgewordene Gott(人の姿になられた神)”すなわち「キリスト」の意味を付加させているのであった。(9)

こうしてみるとファウストの“Wort”はゲーテの言葉であり言語観を示

すものと解して言いすぎるものではなかろう。80歳をすぎても創造的活動を倦むことなく継続したゲーテ自身のものである。ドイツ語の語意の豊かさの好例ではないか。

—(2)—

「書齋」(二)の場には一人の学生が大学者ファウストに弟子入りを希望して訪ねてくる。この時、ファウストのかわりにメフィストーフェレスがこの学生と面談する情景であるから、始めはメフィストーフェレスの言葉は固く、ぎこちない。ファウストの代理をするのであるからそれにふさわしい言辞を弄する必要がある。メフィトには自分の本性をすぐには出せないもどかしさがある。この二人の対話を取り上げてみる。

学 生

先生に教えていただく者は実に仕合わせですね。それで私は神学をやってみようかと思うんですが。(v.1981-1982,○印筆者)

メフィストーフェレス

私は君に、方向を誤らせたくはない。

この学問となると、

誤った路を避けることが頗る困難なのだ。こいつの中には沢山の毒がひそんでいて、それがほとんど薬と見わけがつかないんだ。この場合にも一番いいのはただ一人の教師につき、その先生の言葉を金科玉条として守ることだ。

総じて一言葉というものを尊重したまえ。

そうすれば安全な門を通過して、

確実不易の殿堂に参ずることができるのだ。(v.1983-1992)

「常に悪を欲してまたつねに善を成す。」(v.1335) ところの霊であるメフ

イストにとっては天地を統べている神を研究する学問の神学は嫌悪に値するものであったから、学生に勧めることはしたくないし、出来ないことである。神学には毒と薬がまじっていると諷刺する。詭弁を弄して学生の気をそらそうと努める。

ニヒリストで陰性的なメフィストの言葉には簡潔さがある。しかも機知と鋭い諧謔性が見えかくれもしてることが多い。露骨な社会批判も出てくる。一人の先生について、その先生の言葉を唯一無二のものとして守れということは言いかえれば自分の言葉（メフィスト自身の）を尊重することを勧めた言葉なのである。メフィストの雄弁は学生の心を動かしはするが、学生の頭の中は「粉挽車がぐるぐる回るような具合」になるほど混沌としている有様であった。悪魔の話芸が躍動して遍歴学生の向学心をふるい立たせる場である。

—(3)—

学 生

でも、言葉には概念があるはずでございましょう。

メフィスト—フェレス

それは尤もだ。だがあまり思い煩うにはおよばない。何故ならば、まさに概念の欠けているところに、

言葉がうまく間に合うようにやってくるものなんだ。

言葉だけで、立派に議論もできる、

言葉だけで、体系をつくりあげることもできる、

言葉だけで、立派に信仰を示すこともできる、しかし言葉からは、一点一画も奪うわけにはいかない。(v.1993-2000)

学生は「言葉には概念があるはずでございましょう。」(v.1993)というが、メフィストはさらりとかわす。「概念の欠落」を補完するのも又、言葉であ

るといふぐあいである。悪魔にとっては言葉と概念の関係などどうでもよいことであったから。詭弁が悪魔の本質であった。常に否定する霊のメフィストには人を誑かす欺瞞の言葉しかないように見えるが、それはファウスト側にならった時の見方であってメフィスト理解から離れてしまうものだ。「すべての理論は灰色で、緑なのは生命の黄金樹だけだ。」(v.2038-2039)というメフィストの本心を象徴する言葉から逆説・諷刺・揶揄・学問への嘲笑と悪魔の言葉の重みを感じられるのであった。

III. ゲーテの方言観について

—(1)—

ゲーテの生れたフランクフルト市は南ドイツの方言地域にあったが当時もすでに大都市であったから、この方言は厳密には「方言と口語の中間にある」ような都市方言又は半方言というものであった。ゲーテの父親はたえず言葉の一定の純粋さを子供たちに要求するほど言葉に対して厳格な態度をとるのである。もっとよい言葉を使うように常に心がけさせていたものだがゲーテからはその地方訛りは容易には抜けきれないままである。独特の方言がこの中部ドイツ語にかなり残っており、その訛りの素朴さをゲーテ自身が好んでいた事実もあるし、おもしろがって使っていたふしもうかがえるのである。ライン川とマイン川流域の南ドイツ人は自分の言いたいことを表現するのに[○]比[○]喩[○]や[○]暗[○]示[○]的[○]な[○]文[○]句[○]を多用し、また洗練された良識にもとづいて[○]格[○]言[○]風[○]な[○]言[○]い[○]ま[○]わ[○]し[○]を好む風潮があったという。(○印は筆者)

どんな地方においても、その方言に愛着するのは、ほんとうに方言こそが魂の息吹のような要素をそなえているからであるとゲーテは言うのである。(10)ところで17~18世紀の最良のドイツ語はオーバーザクセンのマイセ

ンの方言から由来したものとされた。その理由はルターの聖書用語がこの方言であったことにある。歴史的には北ドイツを中心としてプロテスタントの勢力が増大するに従って、カトリックも又、それに対して反撃を強めていった結果、30年戦争(1618-48年)へと進展してしまい、ドイツ全土が荒廃の一途を辿ることになるのであった。その一方で17世紀の文学の世界に外国文学の翻訳が流入してきて外来語の氾濫となる状況を呈している。

「国語の力とは他国のものを拒否することではなく、これのみ込むことにある。」⁽¹¹⁾と後年ゲーテはいうが、「のみ込む」よりも「流入する」方がはるかに多いのである。

自国語の発展はこの時代にはなかったのであった。人びとは外来語を自国語におきかえて使うことを流行のようにしていた。16世紀初頭から18世紀初めに至るまでドイツは宗教戦争、オーストリア王位継承戦争で国土ばかりでなく人びとの心までが荒廃していったのである。人びとは既知の事物に対してまでも外国の表現や語法を使わされ、ドイツ人は礼儀作法をフランスに、気品のある表現をローマ人に師事したとゲーテは自嘲めいた言い方をするのであった。⁽¹²⁾このような状況下で当然のこととして国語の浄化運動が起きてきたのであった。オーピッツ (Martin Opitz, 1597-1639) とゴットシェト (Johann Christoph Gottsched, 1700-1766) が時代を牽引することになる。

—(2)—

「ドイツ語よりも微妙で繊細なニュアンスをもつ外国語を使うべきではないというようにすべての否定的な国語浄化論をのろわしく思う。」⁽¹³⁾というの、ゲーテのこの運動に対する見解である。ゲーテの支持するのは肯定的な国語浄化論である。これは生産的なもので、どのような時にドイツ語で書きかえなければならないとか、どんな時に隣国の人の方が決定

的な言葉を持っているかということから起きているものであった。⁽¹⁴⁾フランスの古典主義を模範とした合理主義の文学運動もまもなくドイツ精神の勃興と重なりゲーテを中心とした古典主義時代の幕開きとなる。

このような状況下でオーバーザクセンの方言も次第に衰退してゆくのであった。

ところで少年の頃のゲーテの方言観は晩年には全く変質していた。それは単に経験や年齢に起因するものだけではなさそうである。

1825年4月14日木曜日のゲーテとエッカーマンの対話を見てみよう。

ゲーテが舞台監督をつとめたワイマル劇場ではどのような規準で新人の選考を実施しているのかとエッカーマンがゲーテに質問した場面である。

途中略……俳優という職業は、たえず自分自身を否定し、たえず他人の仮面をかぶって生きたり死んだりする必要があるんだよ。外見や態度が気に入ったら、こんどは朗読をさせてみた。その器官の力と大きさ、それに精神の能力を見るためだよ。私は偉大な詩人の書いた気品の高い作品を与え、彼がほんとうの偉大さを感じとり、それを表現するだけの能力を持っているかどうかを調べた。次に情熱的な作品、野性的な作品を与えて、その人の力を試してみた。……途中略、次に傷ついた心の痛みや偉大な魂の苦悩が書かれている作品を与えて、それによって感動的なものの表現も消化できるかどうかを吟味した。⁽¹⁵⁾このように多方面にわたる条件をクリアした人をゲーテは俳優に仕立てることにしたというから、かなり厳しいものだ。……「途中略……、また弱点がわかると、何よりもまずその人がそこを強化し、鍛え上げるように努めた。方言とかいわゆるお国訛りの欠点に気がつくと、私は、それを取り除くようやかましくいった。⁽¹⁶⁾（○印は筆者）

この方言とかお国訛りの欠点のある俳優の卵を矯正するためにゲーテはそのような欠点を全く持たない団員を推薦して、仲間付き合いをさせて、手とり足とりで訓練させたという。詩人としてのゲーテとは異質の世界をかいま見た気がする。ゲーテが27歳から居住しはじめたワイマルは生れ故郷のメイン川沿いのフランクフルトと大都市ベルリンへほぼ同じ距離の小さな町であった。しかしゲーテにとってはこの小世界の言葉こそが標準言語であって他の地域の言葉は方言と思えたのである。

使用テキスト

Johann Peter Eckermann : Gespräche mit Goethe (F. A. Brockhaus, Wiesbaden 1959)

Goethes Werke Bd. IX, X, XII (Christian Wegner Verlag, Hamburg 1967)

Goethe Jahrbuch Bd. 104 (Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar 1987)

Goethes Faust (Christian Wegner Verlag, Hamburg 1968)

Die Bibel (Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart 1985)

エッカーマン：『ゲーテとの対話』(上・中・下)

山下肇訳、岩波文庫1968

ゲーテ全集9、10、人文書院1968

ゲーテ全集13、潮出版社1980

ゲーテ：『ファウスト』相良守峯訳、ダヴィッド社1966

注

- (1) Erich Lüth : 『Johann Peter Eckermann zwischen Elbe, Heide und

Weimar』(Ernst Kabel Verlag, Hamburg1981)中の推薦文より引用。

- (2) 『詩と真実』(人文書院) P. 27参照。
- (3) 同書、P. 28参照。
- (4) JiddischまたはJudendeutsch。中世ドイツ語とヘブライ語との混成した言語で、ドイツ、東ヨーロッパのユダヤ人に使われている。
- (5) 『Gothes Werke』 Bd. XII. S. 503の1015番引用。(以下G.W.と略す。)
- (6) G.W.のS.89-90参照。
- (7) 『Die Bibel』(Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart 1985)のS.110 DAS EVANGELIUM NACH JOHANNESの冒頭に Im Anfang war das Wort, und das Wort war bei Gott, und Gott war das Wort.とある。
- (8) T. F. L. J. Scheithauer : 『KOMMENTAR ZU GOETHES FAUST』(RECLAM Stuttgart, 1959) S.194から引用。
- (9) 『GOETHES FAUST』Kommentiert von Erich Trunz (Christian Wegner Verlag, Hamburg 1968) S. 508-509を参照。
- (10) G.W. Bd. IX, S. 251より引用。
- (11) G.W. Bd. XII, S. 508の1016番引用。
- (12) G.W. Bd. IX, S. 259より引用。
- (13) G.W. Bd. XII, S. 508の1017番引用。
- (14) G.W. Bd. XII, S. 508の1018番引用。
- (15) 『ゲーテとの対話』(下) P. 78より引用。
- (16) 同書P. 78より引用。

(1992年9月29日)